

平成27年度第2回北九州市立図書館協議会 会議録

1 会議名

平成27年度第2回北九州市立図書館協議会

2 議題

- (1) 図書館運営に関する評価について
- (2) 「これからの図書館サービスのあり方」における、市立図書館の子ども読書活動の推進について
- (3) その他（公共施設マネジメントについて）

3 開催日時

平成27年11月20日（金） 14時00分～15時30分

4 開催場所

北九州市立中央図書館 視聴覚センター 第2会議室

5 出席者氏名

(1) 委員（会長他9名、欠席委員6名）

北九州市立大学図書館長	松尾 太加志
福岡県公立高等学校長協会北九州地区会長	固谷 寛
北九州市PTA協議会副会長	赤峰 稔朗
公募委員	白石 裕子
公募委員	谷之口 博美
北九州市社会教育委員	宮本 和代
北九州市婦人団体協議会理事	阿部 芳美
北九州児童文化連盟委員	柴原 佳代子
北九州青年会議所委員	小迫 美緒
日本放送協会北九州放送局副部長	大坪 和弘

(2) 事務局（中央図書館長他7名）

中央図書館館長	石神 勉
中央図書館庶務課長	酒井 国広
中央図書館奉仕課長	埴谷 章子
中央図書館庶務課庶務係長	岩松 栄子

中央図書館庶務課奉仕係長	東 豊
中央図書館視聴覚センター館長	三栗谷 進
教育委員会生涯学習課長	梅下 勝己
教育委員会生涯学習課図書館建設担当係長	古郷 浩一
教育委員会生涯学習課生涯学習係長	内中 京子

6 傍聴者

なし

7 会議次第

- (1) 新委員紹介
- (2) 議事（報告、質疑応答）

8 会議経過（発言内容要旨）

新任委員紹介について

（事務局）

今回の協議会では、新たに2名の委員の方が就任されましたので、紹介させていただきます。

新委員は、北九州市PTA協議会副会長 赤峰稔朗委員、北九州市社会教育委員 宮本和代委員の2名です。

(1) 「公共施設マネジメントについて」

資料「北九州市公共施設マネジメント執行計画素案（抜粋）」等に基づき、図書館の公共施設マネジメント実行計画素案内容について生涯学習課長より説明。

（会長）

分館と地区館の説明がありましたが、個別施設のマネジメント計画の表中に「更新」と書いてあるのとそうでないのがあります。「更新」というのは何をするのか。分館には「更新」という言葉が入っていないんですが、それは何を意味するのかを教えてください。

（事務局）

地区館については40年先以降についても充実していくということで、建物が古くなったこのあたりでも建物を更新しますという意味です。分館については、この40年先

までは維持をしますと今回決めています、その先のことについては未定で、どうするかはその時の状況によってまた考えることになります。

(会長)

それから、これからの図書館サービスのあり方についての答申をふまえてという記述がありますが、このサービスのあり方の検討と公共施設マネジメントの実行計画を、どこまで整合性を合わせればいいのでしょうか。

(事務局)

今後、必要な施設の更新にあたって、複合化や多機能化を図るとともに、利便性の高い場所に集約するという点については、今回、門司港地区の国際友好記念図書館と門司図書館についてはひとつに集約し、なおかつ、市民会館や区役所といったいろんな施設が複合化された建物に入り、会議室等の共用化をすすめ、そして、利便性が高いJR門司港駅近くのエリアにそういう建物を建てるというイメージで、門司港地域のモデルを考えています。

分館の廃止では、企救分館については小倉南図書館整備に伴うもので、八幡東分館、戸畑分館については廃止検討となっている中で、これからの図書館サービスの面から議論いただければと思います。

(会長)

はい、わかりました。他にありませんか。

(委員)

高齢化というキーワードがあるのですが、ただこうした施設の集約がある一方で、財政の問題とかいろいろあるのはよく分かるのですが、そうした中で高齢化というところを考えると、当然、交通弱者とかが出てくるわけです。その補完措置というか、そうしたときに市民センターを活用するといったことを、図書館の方で考えていることがあるのでしょうか。

(事務局)

現在、市民センターには「ひまわり文庫」がありまして、平均で約500から600冊位の図書をおいています。数ヶ月に1回、図書館の職員が本を交換しておりますが、市民センターにおいて本の閲覧や、貸出を行っています。そういうところを充実していくやり方があるのではないかと考えています。

(委員)

一方では、借りやすくするためにインターネットを使うとかいろいろあると思いますが、

やはり高齢化になってくると利用しやすくなるというのはだんだん限られてくるわけで、そうするとやっぱり一番身近な所で利用しやすい形がなにかとれないのかということというのは、考えていかないといけないという気がします。

(2) 「図書館運営に関する評価」について

資料「北九州市立図書館の評価の実施」、資料「北九州市立図書館の評価」、資料「アンケート集計結果報告書」に基づき、「これからの図書館のあり方」の5つの視点ごとに内部評価を行った北九州市立図書館の評価について庶務課長より説明。

① 視点「図書館ネットワーク（連携）の構築」について

(会長)

評価はおおむねBで、広域利用については諸事情があってできないということでDとなっていますが、他の事に関しましてはBの順調であるということですので、おおむね全体的には順調だというふうな評価であると思っております。

先程ご説明の中でAの評価となっている「貸出図書セットの拡充」については、貸出実績が増えており評価をしてよいと思います。こうしたところについては外部評価の文言として入れてもよいと思います。

事前に委員からいただいた意見の中に、「小・中・高校生でニュースレターは、それぞれ内容は違うのでしょうか」というようなご質問いただいておりますので、そのへんについて事務局の方で何かわかることがあればお願いします。

(事務局)

図書館によって、一般向けの図書館だより、または館によっては一般向けと子供向けの図書館だよりを分けて作成したり、それとは別に子供向けのおすすめ本リストを作ったりということ、それぞれの館が工夫した取り組みで図書館だよりを作り、それを近隣の小中学校に配布したり、また館によっては町内会に可能な範囲で情報提供を行うようなこともしています。

それによってどれくらい効果があるのか検証ができていないのと、ホームページ等で見ると一律のフォーマットを持っているわけではないので、今のところは各図書館での配布が主となっています。今後、別の評価の項目にも関わってくるかもしれませんが、各図書館がそれぞれに行っている取り組みの情報発信ということもございますので、将来の課題として、あわせて検討させていただきたいと考えています。

(会長)

おそらく後の議題にも出てきますが、実際に先程のアンケート調査を見ると、圧倒的

に中高校生の利用がぐっと減っているわけですね、そこをどういうふうに掘り下げていくかということはやはり考えていかないといけません。

② 視点「市民の学びに役立つ図書館」について

(会長)

評価がすべてBとなって順調だということですが、前回の評価ではCであったところがBになったと、先程、説明いただきましたが、そういったところは外部評価の中に入れてもよいかと思っております。

また、国立国会図書館のサービス導入については、実際の効果・利用実績はどうか。

(事務局)

研究者の方の利用がやはり中心になりますが、国立国会図書館がすでに所蔵していて貴重であるとか、現物を動かすと傷んでしまうというようなことで、従来、東京や関西に行かないとご利用いただけなかったものを国立国会図書館がデジタル化しており、希望する公共図書館などにネットワーク配信をするものを、国立国会図書館デジタル化資料の閲覧複写サービスとっております。

地方にしながら、ネットワークをしている公共図書館ではそのモニターを確認をし、一枚10円の複写料を払えば、プリントアウトをして手に入れることができるというサービスです。平成26年度の導入後、北九州市でこれが導入されたということが定着してまいりまして、今年度に入って件数はやや伸びております。

(会長)

市以外の近隣の方々も、ここに来て利用してもよいのですか。

(事務局)

結構、九州それから山口あたりの研究、大学関係の方などにお越しいただいてご利用されている方が多いです。

(会長)

わかりました、そういうことも含めてここについては順調にすすんでいるという評価にしたいと思います。

③ 視点「次世代の育成を支援する図書館」について

(会長)

先程、中高生の話が出てきましたけれども、やっぱりヤングアダルトですね、このあたりのところがまだやはりちょっと十分に進んでないというところになるわけなので、ここは少し今後やっていかなければなりませんね。

(事務局)

一般のお客様とそれから小学生くらいまでの未就学児から児童まではよくご利用いただいていると思うのですが、中高校生の読書活動に図書館がなかなか入っていないというのは課題として持っております。

「子ども司書養成講座」というものがあり、学校で読書リーダーになってもらうということを目的に養成しているのですが、もっと中学生や高校生へのアプローチに今後取り組まないといけないというのは考えていますので、具体的な取り組み案についてご意見等いただければと思います。

(委員)

高校生の中にはグループを組んで小説を書いたりする子どもたちとか、演劇部の子どもたちが脚本を書いたりとかしているのですが、それが何か形になるような支援とかというのは図書館でできるのではないかと、何か自主制作のものを置いてもらえるような支援とかがあれば、勉強以外で使える図書館というふうに考えるのではないだろうかと思いました。

(事務局)

グループで小説を書くというのは、発表の場は例えばどのようなところでしょうか。

(委員)

発表の場はそれぞれ学校が主催する文化祭もそうなのですが、演劇部だけでどこか市内で発表するところが高校ではあるみたいなのですが、その時に誰々さんが書いた脚本を違う学校が演じたいとか、発表する場はあると思うのですが、形にしていく中で誰かに指導を受けるということはなかなかないようです。形になったものはどこか皆さんの目に触れるような場所に置かれるというようなこともないようなので、もし図書館にそういうコーナーとかそういう支援とか指導者がいるようになれば、そういうものを書くとか、何か形にするものをやりたいと思っている高校生は確実にいると思います。

(事務局)

ありがとうございます。今後、いろいろ調べさせていただきたいと思います。

(会長)

サポーターの話としてCになっているのですが、中学とか高校とかの図書館との連携といますか、あり方といますか、たとえば私のところは大学なので大学の方は図書館の学生サポーターみたいなものがあって、学生が自分たちで本を選書するとかいろんな活動をやってくれています。中高校生ぐらいになると、そういうことも学校図書館の中でもそういうことをやれるのかなという気がします。そういう活動が図書館の中で出てくると、今度は市の図書館に対してもそういうことをやってみようという、そういうモチベーションも出てくるじゃないかという気がします。

(事務局)

取り組み事例としてはそんなにはないのですが、子ども司書養成講座を受講された中学生を中心に、おすすめ本を書いていただいて、やはり非常に本を読む子ども達ですので、テーマを決めてポップを書いていただいて、それを図書館に掲示をさせていただくというような取り組みを少しずつやっております。そうするとかなり面白いものを書いてくれるということがあります。それから、各図書館で同じように中学生や小学生に来館した子供たちにおすすめ本のポップを書いてもらってそれを投票してもらって、ビブリオバトルのポップ版みたいな形でやっているというような取り組みを工夫してやったりすることもあるので、中学生や高校生の読書活動を生かした企画などもおそらく工夫をすればいろいろ出てくるのではないかと思います。今そこまでできていないのですが、工夫次第かと考えています。

④ 視点「誰もが使いやすく、情報や人が交流する図書館」について

(事務局)

事前にいただいた意見票の中で、「インターネット予約を評価していますが、一方で受け渡しはどのようになっているのでしょうか」という意見をいただきました。

受け渡しについてはインターネットで自分が取りに行きたい館を指定することができます。それでどこの窓口か、中央図書館であれば一般の窓口だったり、勝山の窓口だったりいろいろありますが、指定することができます。お客様にはメールや電話等といったどういう方法でご連絡したらよいかという内容も書いてありますので、連絡を行い図書館に取り置きしている図書を直接取りに来ていただいています。

インターネット予約できることによって図書館に行かずに180万冊ぐらいの図書が市立図書館全体でありますので、自分の読みたい本が選んで、自分が探さずに窓口に行けば準備されていて、すぐにお渡しできるという形になっています。ですから、インターネットの予約はだんだん増えている状況です。

(委員)

これは、とても便利ですよ。

(会長)

インターネットの話になるのですが、他の委員の方からも、どうかするとちょっと情報が多いような気がするというご意見もいただいています。

一方でデジタルデバイド、やっぱり使える人と使えない人がいますので、そこについてどう対応するか、今なんでもインターネットで、国勢調査もインターネットでというようにありましたけれども、やっぱりまだそこまでいかない方もおられると思います。そのあたりのところも一方でやはりきちんと考えないといけない。

もちろんインターネットできるということを、充実していくことは必要なのですが、そうでない方へのサービスもきちんとやるということについてはいかがでしょうか。

(委員)

ハンディのある方は自分ではできなくてもサポートをする人がいて、そこで習うことによってパソコンの使い方を覚える、本を予約してちゃんとまたボランティアの助けを受けながら近くのところの図書館で本を貸していただける、取りに行けばいいわけですからそういうこともあります。まったくそうではない高齢者でパソコンとかそういうものが全然苦手でも、必要ないという方たちもやっぱり図書館を利用されるわけです。そういったときに自宅から歩いていくことで健康にもなるし、そういうこともふまればやっぱり二極化ということがあるから、これからどう取り組んでいくのかは特に地域の各区にある館をもっと充実していただくと、より使いやすいというか、利用者にもやさしい図書館を目指していただけるのではないかなと思います。

(事務局)

今、窓口の方で先程リクエストの予約がインターネットでできるというのもありましたが、やはり苦手な方はいて、そういう方は気軽に窓口にお声をかけていただいたりリクエストをしていただいたりというのも従来からやっておりまして、そちらを好む方もおられます。

同時にご自分で検索できるパソコンをカウンターの横並びに置いておきますと、だんだん高齢者の利用者の方も、やり方を覚えると気軽にそちらの方にご利用になるというのもございますので、サポートひとつなのかなと考えています。窓口の司書に判らない事を聞いていただければ、だんだんご自分の使いやすいやり方をおぼえていただけるということもあります。

(会長)

スマートフォンでの予約には対応しているのでしょうか。

(事務局)

スマートフォンによる検索と予約にも対応しております。

(委員)

高齢者の方はタブレット型のちょっと大きいものを使ったりする方をよく目にしますので、そういった時にそのトップページにいくまでに画面を拡大をする方が多かったので、トップページだけでもスマートフォン用のタイプになれば、そのまま検索できるので良いかと思えます。

⑤ 視点「市民参画型の図書館」について

(委員)

具体的にボランティアの方たちの役割というか、どのくらいの頻度でどんなことをされているのか教えてください。

(事務局)

大きくわけまして、図書館ボランティアと読み聞かせボランティアというボランティアがいらっしゃいます。図書館ボランティアというのは、主に書架の整理ですとか、返却された本のクリーニングなど、それからイベントを行うときのイベントのお手伝いなどをお願いしています。基本的には特定の館で活動されております。

もうひとつが読み聞かせボランティアですが、こちらはボランティアグループで図書館でだけ活動するというわけではないのですが、図書館で乳幼児向けのおはなし会とか読み聞かせ、イベントなど行っていただいている、ボランティアバンクというところに登録しています。登録をしたボランティアさんは図書館だけでなく、幼稚園、保育所、それから学校、市民センターなどでも読み聞かせをしていますので、読み聞かせをしてくれる方がわからないので紹介してほしいとご相談がきたときに、情報提供をさせていただくための人材バンクとして設立したものです。

(会長)

こういうボランティアも本当はいろんな世代の方がいて、うまく交流ができればよいだろうと思えます。高齢者の方もやるし、若い方もいるというようなことが理想的ですね。

(事務局)

平日の日中から夕方時間帯に活動していただける方、それから土日に活動していただける方という、お仕事をしておられる方が多い関係か、やはりご家庭に入られた方、またはOBになられてでも地域活動やボランティア活動をしたいという方が中心に

なりまして、どうしても高齢の方が多くなっております。ただ少数ですが、30代40代の方などもおられます。

(委員)

今後、初心者コースが年2回くらいされているということなので、やはりもっとこうPRすれば3回して増やしていくということは可能でしょうか。あんまり増やしすぎてモトか、たぶんいろんな問題が出てくるでしょうけど。登録する分にはかまわないので、こういった講座を通して、たくさんの方が登録してもよいということでしょうか。

(事務局)

講座を受講していただいてその読み聞かせの技術などを学んでいただくという場はございます。これをいかに活動につないでいただくか、図書館で行う読み聞かせボランティアグループなどをご紹介差し上げているのですが、今それだけではなく、たとえば地域や学校で活動の場はあると思います。そういうところまでご紹介の幅が広げられるかどうかということが今後の課題かと思ひまして、いずれ取り組んでいかないといけないと感じています。その受け皿といいますか、つなぐということが確実にできるようになれば、おのずから養成講座もどんどん増やして行って、受け皿を整えて講座を増やしていく形になると思っています。

(委員)

今、129館の市民センターもそういった人材のバンクはあるのですが、実際の活動する方たちがどれだけいるかということになると少ない。だからこうして増やしていきながら、市民センターと連携をとれば、サポーターさんとかの養成講座といったそういうものと連携をとってPRしていくと、もっと増えていくのではないかと思います。

(事務局)

今、それが課題で、特に就学前の子ども達との対応をどうしたら良いか、市民センターレベルでする必要があるのですが、そのような意味では多くのボランティアを養成しなくてはなりません。そのためにはどうやって人材を養成していくか。今のような回数ではなかなか対応できない状況です。

(会長)

各視点についてご議論いただきました。これまでの議論をとりまとめて外部評価を最終的に書くという形にしたいと思います。また、総合評価の外部評価はそれをふまえた形で書くということによろしいでしょうか。

(事務局)

「北九州市立図書館の評価」に関しまして、事前に、委員の皆さまよりご意見いただいております。本日も議論をいただいた内容をふまえて、外部評価の参考にさせていただきたいと思っております。

この外部評価につきましては、松尾会長と瀬藤副会長に確認していただきながら、まとめていきたいと思っておりますので、それを図書館協議会の外部評価として整理したいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

(会長)

会長と副会長の方にご一任いただければと思っております。

(3) 「これからの図書館サービスのあり方」における、市立図書館の子ども読書活動の推進について

資料「本市の子どもの読書活動の課題と今後のあり方」、資料「これからの市立図書館における子ども読書活動の推進について」等に基づき、奉仕課長より説明。

(委員)

市立図書館と各地域の市民センターであったりとか、NPOさんであったりとか、そういうところと一緒に協働を考えるようなコーディネーターの方の配置とかは考えてますでしょうか。

(事務局)

今のところは、市立図書館と地域やそれから団体をつなげるようなコーディネーター配置というのはまだ検討しておりません。今ある仕組みとして、たとえば市民センターには生涯学習推進コーディネーターがいたり、子育ての関係になりますけれども子育てサポーターといったようなボランティアでやってくださっている方がおまして、市民センターを主に活動しておられますので、現在あるボランティアのその仕組みを生かしていくということも考えられますし、それから新たなサポーターの仕組みを考えるということもあるかと思っております。

(会長)

そこの連携をうまくやるためのコーディネーションといいますか、オーガナイズというか、そこをうまくやる人がやっぱりいないと、それぞれがやりたいことをやっていくという形になると、うまく進まないのかなという気はいたします。

(委員)

資料の中に子ども向けの相談窓口の設置とあるのですが、これはあらゆる相談ということですか。本に関係する相談ということによろしいですか。

(事務局)

本を中心とした相談ですけれども、本や図書館にある本に限らないですね、パソコンとかインターネットもございますので。そのようなものを生かして解決できるものなどがあります。具体的な事例としては、八幡西とか戸畑に聞いたのですが、夏休みの宿題、「自由研究をしないといけないんだけど自由研究のテーマで何かないかな」という相談に来たり、たとえば少し高学年になってくると「興味があるアニメーターになりたいんだけど」とか「声優になりたいけどどうやってなったらよいのかわからない。僕は何を勉強したらなれますか？」というようなキャリア教育に関する相談だったり、結構幅広く子どもから相談がきていますと聞いております。それを図書館の司書が本とかネットの情報とかそれから図書館で解決できないものは、たとえば虫だったら、「北九州市ほたる館があるからそこいってごらん」とか、「環境ミュージアムがあるからそこでなにかちょっと面白い自由研究のネタがあるんじゃない」というようなことをしていると実例で聞いております。

(会長)

今のような話は重要だろうと思います。単に図書館の窓口ということではなくて、今大学もそうなのですが、図書館というのが一種の学習支援の機能を持っていないといけないというのがありますから、図書館の司書にどういうことを求められるかということ、ただ単に図書館のどこに行けばあるかとかいうことではない、広い意味での学習支援ですね、だから今いろいろ「この虫は何？」ということも含めて、学習に関する支援をワンストップでそこで受け止めていただいて、もちろんそこで解決できないときはここに行けばいいよというようなそういう役割を、やはり図書館では学習機能を持たないといけないので、そういう役割を持たせるような窓口があるとよいと思います。

(委員)

資料の中で図書館のほうの研修、ここには選書やレファレンス等の研修を行うとありますが、現段階ではどういった研修が行われているのでしょうか。

(事務局)

現段階では、内部研修や業務の場を生かしましたOJTなどを中心に行っております。それから専門的な研修は、福岡県立図書館が管内の司書の研修機能というのを持っておりますので、そちらに派遣して研修していただくというようなことをしております。ただそうしますと、派遣をするとなかなか人数がさばけないものですから、持ち帰りま

して部内研修として、また、それぞれの図書館または中央図書館などの場を使いましてベテラン司書が講師になって、または外部講師を招いて選書やレファレンスなどの研修をさらにステップアップをしていくようなことを考えています。

(委員)

その中に組まれているのかどうかちょっと判らないですが、接遇の研修というか、そういう内容があるともっとこう幅広い方に対応できるようになっていったらよいと思いました。アメリカの図書館とかでは、ホスピタリティも入っていきやすくて、館長とかが自ら歩き回っていて声をかけたりとかしていて、そういうのをちょっと聞いたことがあるので、お国柄というのものもあるのかもしれないですが、参考にしてはどうでしょうか。

(会長)

研修とか、支援とかいろいろな言葉が出てくるのですが、じゃあ具体的にどういう研修をするのかというのが重要な話になって、形式的な研修ではなくて、今回子ども読書活動の推進ということで、子どもに声をかけてあげるようなことも必要だというような研修も必要なのかどうか、そういったことも含めて研修とか支援の中身ですね、そこがやはり重要だと思っております。

他には何かございませんか。他にご意見がなければ、本日の協議会は終わらせていただきます。